

## はじめに

この1両年、それまで10数年も続いてきた経済の高度成長、地域開発のすさまじい進展に対して、ようやく反省の気運が盛り上がり、おそまきながら、自然及び文化環境の回復が大きく叫ばれはじめている。1973年は、創立21周年を迎えた当研究所としても、ますます、その役割が重くなり、文化財保存のための各分野の調査研究は、年を追って緊急性を増し、その対応に多忙をきわめた1年であった。

平城宮跡は東院地区の一括買上げが、いよいよ具体化するとともに、宮跡の保存整備が急務となってきたばかりでなく、平城京の解明のための調査も宮跡周辺部の都市化の進行につれてますます増大しつつある。

また、飛鳥・藤原宮跡等この地区の文化財の保存については、本年度から独立した飛鳥・藤原宮跡発掘調査部によって、保存の基礎となる調査が本格化しつつある。同時に、飛鳥資料館の建設も、当研究所の仕事の一環として、来年秋の開館を旨として進められている。

南都諸大寺を中心とする畿内古社寺の諸分野の調査研究も数多の課題をかかえている。広範な研究を乏しい陣容でおしすすめることは容易ではないが、所員一同常に新しい気概をもって立向って行きたい。

この年報を発行するに当たり、関係各位の深いご理解と絶えざるご支援を願ってやまない。

1973年12月

奈良国立文化財研究所長

内 山 正